

奄美大島宇検村における「墓の共同化」

－田検「精霊殿」創設の事例から－

福ヶ迫 加那

“Communalization of Tombs” in Uken Village, Amami Ōshima (Island), Kagoshima Prefecture: A Case of the Establishment of Taken “Shourouden”

FUKUGASAKO Kana

鹿児島大学大学院人文社会科学部 〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-30
Kagoshima University Graduate School of Humanistic-Sociological Sciences
1-21-30, Korimoto, Kagoshima-shi, Kagoshima, 890-0065, Japan

Abstract

This article discusses the process of establishing the communal tomb called “Shourouden” in Taken, Uken Village, Amami Ōshima, and shows the factors of enabling this process at an early stage. The rapid social changes and the population outflow after the reversion of Amami Islands to Japanese administration became a momentum for both the villagers and the migrant villagers to think about the possibility of increasing the care of neglected tombs and thus to realize the “communalization of tombs”. The establishment of “Tango Isshin Kai”, which celebrates various events for village children, was given as a precedent for “communalization” as a way of improving the existing situation in the village. The idea behind the establishment of “Shōrōden” came from the villagers who viewed the re-construction of the tomb as a way of “valuing ancestors”. Looking at the establishment of Shourouden from the viewpoint of material aspects, the donation of money and land from migrant villagers and the villagers' labor service could be given as contributing factors.

From the above, it could be said that Taken people sought the communality or cooperativity in their tomb management in the form of “Shourouden” at the time of rapid social change and an uncertain future. Thus, the “Shourouden” became a pioneer case and model for other locations in Uken Village.

Key words: Amami Ōshima, communalization of tombs, Depopulation, neglected tombs, Uken Village

序 論

近年、奄美大島本島の南西部に位置する宇検村では「墓の共同化」が進んでいる。なかでも他集落の共同納骨堂に先駆けて創設され、その後に造られたもののモデルともなったのが田検集落による共同納骨堂「精霊殿」であった。その創設はおりしも本土復帰から間もなく20年という1972（昭和47）年のことであった。奄美群島においては初の試みだとされ、鹿児島県内において「納骨堂」が相次いで建設された時期とも合致している¹。

県内の過疎・高齢地域における共同納骨堂を扱った研究としては、大浦町を対象とした井上治代の研究が挙げられる（井上 2001, 2003）。井上は墓の世代的継承を一つの指標にして、家族の変化に伴う墓の変化から墓祭祀の脱家過程を捉えている。たとえば、大浦町では戦後の産業化による人口流出を背景に、1970（昭和45）年前後から省力化や管理の利便性等を求めて共同納骨堂が地区ごとに設けられた。井上は集落の土葬墓から共同納骨堂への移行を、より「共同性」が強化された形だと指摘する（井上 2001：63）。この共同納骨堂で意識される「共同」とは、「地区の皆が資金を出しあって納骨堂を建設し、共同で運営・使用している」（井上 2003：87）という意味である。あくまで個別の「納骨壇」は従来の墓の代わりであり、納骨スペースは共有しない（井上 2003：87）。そして、基本的には個別の納骨壇前にて参拝する様式をとる。

他方、一地区の住民が納骨スペースまで共有する場合もある。たとえば、新潟県糸魚川の百霊廟がそうである。創設の経緯は孝本貢（孝本 1992, 2001）に詳しいが、社会移動の増大による無縁仏増加への危惧に対処するため、1916（大正5）年に集落的に納骨する合葬墓として一村一墓を設けたものである（孝本 2001：68）。なお、百霊廟では納骨スペースも参拝スペースも集合化されている。設立後は盆の法要や清掃など区による管理が行われてきたが、進む市街地化と移住世帯の増大を受けて、1982（昭和57）年からは任意組織により維持管理されるようになっていく（孝本 2001：75-81）。

こうした管理や納骨空間に家族以外の人々を含み込む形態の墓に全国的な注目が集まった背景には、1980年代末から墓地不足や墓の継承不安という問題に応える形で起こった、新しい葬送や墓を求める動きがあると考えられる。

宇検村においては、1990年代半ばから墓地環境の改善や利便性の向上、管理者の確保を求めて、集落民がともに資金を出し合い建設する共同納骨堂（「精霊殿」）の建設が相次いでいる²。なお、「精霊殿」の場合は個別の納骨スペースを確保しながらも参拝スペースは集合化されており、施設をともに利用し管理する形態をとる。

さて、戦後の奄美大島、なかでも本島地域の墓制に関する民俗学ならびに人類学

1 鹿児島県内の納骨堂数は昭和40年代から昭和50年代にかけて増加する。

2 2013（平成25）年8月現在、宇検村内の14集落中6集落が「墓の共同化」を行い、現在も1集落が活動中である。各集落の「精霊殿」完成年は以下の通りである。田検1972（昭和47）年、芦検1996（平成8）年、部連1997（平成9）年、屋鈍2000（平成12）年、名柄2009（平成21）年、阿室2012（平成24）年、湯湾（計画中）である。

的な研究は、特に洗骨改葬に関心が払われてきた。しかし、1990年代に入るとこうした研究は減少する。代わって2000年代に入ってから、土葬から火葬へ移行するプロセス、あるいは火葬化が葬墓制にもたらす変化についての研究が積み重ねられている³。宇検村における近年の「墓の共同化」現象もまた、火葬化がその背景にあるといえる。

宇検村の「墓の共同化」を主題として扱った先行研究としては、芦検集落の「新しい共同墓地」⁴を取り上げた福岡直子の研究がある（福岡 2000）。福岡は1996（平成8）年に完成した「新しい共同墓地」建設の経緯と、墓地改修によって生じた墓や集落への帰属を通して墓制の変化を捉えている。建設の背景には、1950年代後半の県道整備に起因する墓地環境の悪化に対して抱く「御先祖様に申しわけない」という気持ちと、相次ぐ離村者に伴う「無縁仏」の増加があるという（福岡 2000：49）。墓地改修の提案はあったものの、1970年代から1980年代には、集落内の環境整備に伴う事業が続いたことも墓地改修を消極的にしていた。しかし、1990年代初めに行われた樹木伐採により環境が改善されたことを評価する声もあり、1993（平成5）年に「芦検共同墓地公園」の建設計画が始動した（福岡 2000：49-51）。福岡はこの計画が実現しえた要因として、先祖を敬う気持ち、集落内の機能的な組織構成、郷友会による支援、共同墓地における無宗教性、集落の個性、平等性の重視等を挙げている（福岡 2000：55-56）。また、福岡は旧墓地で使用されていた石塔と新共同墓地の納骨室を対応させることで、共同管理へ移行しても「一統一族」（ヒキ）⁵という旧墓地の利用原則は納骨室の利用に際しても変わらないとする（福岡 2000：64）。他方、「新しい共同墓地」がもたらした変化として、墓を通した系譜関係認知の機会が失われ墓石が個々の家（一統一族）の記念碑へと変化したこと、そして他出者の遺骨の納骨に際して区長が立ち会い入墓者の過去帳を作成するという第三者の関与を指摘している（福岡 2000：67-68）。

本稿で扱う田検「精霊殿」もまた、同じく宇検村内において創設された共同納骨堂である。ただし、芦検など他の「精霊殿」と比べて特徴的なのは、本土復帰後、特に宇検村の人口減少が著しかった昭和40年代に集落が即応する形でいち早く「墓の共同化」に取り組んだ点である。また、行政からの指導や補助金とは関係なく、身近な先例もない中で、なかば「ひらめき」に近いような「墓の共同化」がどのように実践されてきたのか。まずはそのプロセスを詳細に記述し、実現に至った要因を明らかにしたい。以上のことから、本稿の目的の第一は宇検村田検集落において「墓の共同化」がどのような社会背景のもとで成し遂げられたのか、当時の宇検村が置かれていた社会状況の中に位置付け理解することにある。その上で、どのような考えのもと「墓の共同化」が案出され、受け入れられ、実践していったのか、

3 たとえば、加藤（2001）や津波（2009）らを挙げられる。

4 公園と共同納骨堂の全体を指してこのように呼称されている。

5 祖先中心の親族カテゴリーで、父方母方どちらともつながりを持つとされる（上野 1980:153）。ただ、本稿ではヒキが何を指すのか、また墓とどのような関係にあるのかについて深めることを目的としないため、「墓地を共有するのが一統一族（＝ヒキ）である」（福岡 2000：51）と仮置きして論稿を進める福岡に倣う。

一連の創設過程を描くことが第二の目的である。そして、何故、田検集落では他に先駆けて創設が可能になったのかを複数の視点から提示し、最後にまとめと展望を述べたい。

なお、本稿で用いる資料は2007（平成19）年度と2013（平成25）年度に田検集落在住の方々を対象として、断続的に行った短期の現地調査から得られたインタビュー資料と、集落の方々が作成した記念冊子や小冊子⁶に基づくものである。

本土復帰後に生じた急激な社会変動

調査地の概要

宇検村は奄美大島本島の南西部に位置する。村の9割を山間部が占め、焼内湾沿いに14の集落が点在している（図1）。2010（平成22）年の国勢調査によれば世帯数935、男性905人、女性1,027人、合計1,932人が暮らしている。現在の産業別就業者数を見ると、総就業者830人中第1次産業231人（全体構成比27.8%）、第2次産業160人（19.3%）、第3次産業439人（52.9%）である。

村内の道路が整備されるまでは集落間を容易に行き来することができず、かつては船での移動が行われていた。こうした地理的条件によるものか、集落ごとの性格、文化や方言が独自性を備えているといわれる。宇検村から旧名瀬市（現在の奄美市名瀬）間の移動手段としては、戦前から定期船が就航していた。しかし、焼内

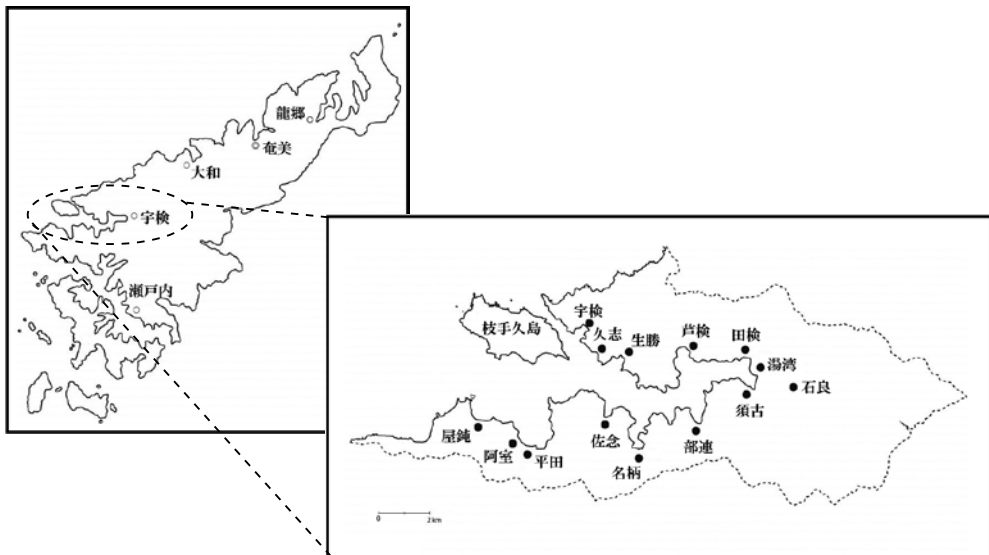


Fig.1 Uken Village.

図1 宇検村

6 田検「精霊殿」の10周年を記念して1982（昭和57）年に集落が作成した『田検精霊殿10周年記念誌』、ならびに2005（平成17）年に作成された小冊子『精霊殿の誕生と歩み』を参考にした。

湾沿いに点在する各集落に寄港したのち名瀬に向うため、日帰りでの往復はできなかった。その後、復帰後の奄美群島振興開発事業による道路整備に伴い、1961（昭和36）年に旧住用村新村（現在の奄美市住用）と湯湾間のバス乗り入れが始まり、名瀬から宇検村まで約3時間で来られるようになった。その後、1969（昭和44）年には村内一周道路も完成し、昭和50年代になると一般家庭にも自家用車が普及するようになった。以後、道路整備は進み、現在では名瀬と宇検村湯湾の間を片道1時間程度で行き来できる。

本稿で取り上げる田検集落は、宇検村の中心的集落である湯湾集落に隣接している。かつて1887（明治20）年から1908（明治41）年まで、宇検村の前身である焼内村の役場が置かれていた。また、1880（明治13）年には小学校が設置され、小学校と中学校にはいまも周辺集落から子どもたちが通ってくる。現在、集落内には食品や雑貨を扱う商店が1軒あり、隣の湯湾集落には役場や診療所もあることから、村内では比較的恵まれた位置環境にある。2013（平成25）年8月末の役場調べによれば、田検集落の世帯数は78、男性81人、女性83人の合計164人が生活している。宇検村内では4番目に人口が多く⁷、高齢化率が60%を超える集落も抱えるこの村にあっては比較的若い世代も多い。高齢化率は約34%である。

産業の変化

奄美大島は1946（昭和21）年から1953（昭和28）年にかけて本土から行政分離されたことで戦後復興が遅れた。そのため、復帰後の特に昭和30年代以降に生じた人口移動や就業構造の変化、行政資本の投入による変化は本土と比べて急激なものであったとされる。戦後の宇検村における社会変化を捉えた先行研究としては、昭和30年代初め九学会連合によって行われた第1回奄美調査と、続く昭和50年代の第2回調査が代表的である。そこで、まずはこれらの調査に関連した報告をもとに、本土復帰後に生じた社会変動を産業の変化と人口の減少、そして集落内の社会関係の変化という側面から祖述する。以下では、調査に参加した社会学会班による『奄美農村の構造と変動』の第八章「奄美大島南部過疎地域の解体過程」（若林 1981：269-340）を参照しながら、当時の宇検村が置かれていた状況を明らかにしたい。

宇検村は北部地域に比べて作付面積が少なかったとはいえ、昭和30年代以降にはそれまでの自給作物である甘藷に代わりサトウキビが主要作物になった。農家によってサトウキビ栽培と製糖が並行して行われていたが、1963（昭和38）年に瀬戸内町の拓南製糖が操業を開始するとサトウキビ栽培を拡大し工場への原料供給に徹するようになった。しかし、1971（昭和46）年に工場が操業を停止すると、すでに製糖する術を失っていた農家はこのあおりを受け、サトウキビ作は一気に縮小衰退した。さらに、米の生産調整、減反政策が行われたことで、宇検村の農業は壊滅的な状況に陥ったという（若林 1981：296-304）。農業が立ち行かなくなった宇検村では、林業、大島紬の生産、公共事業に依拠するようになる。昭和30年代後半に

7 人口が3番目に多い須古集落には特別老人ホーム（入居者約50名）と障害者支援施設（入居者約50名）があるため、2施設の入居者数も含まれている。これを踏まえると、実質的な集落人口としては3番目に多い。

はチップによる林業就業者が増加し、昭和40年代には村内で3つのチップ工場が操業を開始した。しかし、外材に押された不況と相まって昭和50年代に入り不振となった（若林 1981：289-290）。また、大島紬は生産流通組織や技術者の基盤が弱く、人口の急減による織子数の減少といった要因もあり、どちらも代替産業とはなりえなかった（若林 1981：305-311）。

田検では、戦後、復員者など大勢の人々が帰郷したが、軍政下には沖縄へ、そして復帰後は多くの若者が関西方面へ出稼ぎに出た。たとえば、1955（昭和30）年の集落民の就業状況は、戸数92、人口382人のうち22戸が専業農家であった。これが1977（昭和52）年には、戸数88、人口235人へと減少し、さらに世帯主が農業に従事するものが2戸へと減少している（松原ほか 1982：438）。こうした農業の衰退に代表される産業の変化も、人口流出を後押ししたと考えられる。

人口の減少

さて、次に人口動態を確認したい。たとえば、復帰間もない1955（昭和30）年には6,301人あった宇検村の人口だが、1975（昭和50）年には2,671人と急減している（図2）。人口の減少が墓との関わりでどのような問題を生んでいたかだが、一つに墓管理の負担増加を挙げられる。たとえば、九学会連合による調査の際に田検との比較対象地として選ばれた屋鈍集落は高齢化率が約46%⁸という村内でも高齢化の進む地域である。屋鈍集落は2000（平成12）年に「精霊殿」を建設しているが、これ以前に旧墓地で使用されていたのはカロートを伴う石塔墓であり、その数は70ほ

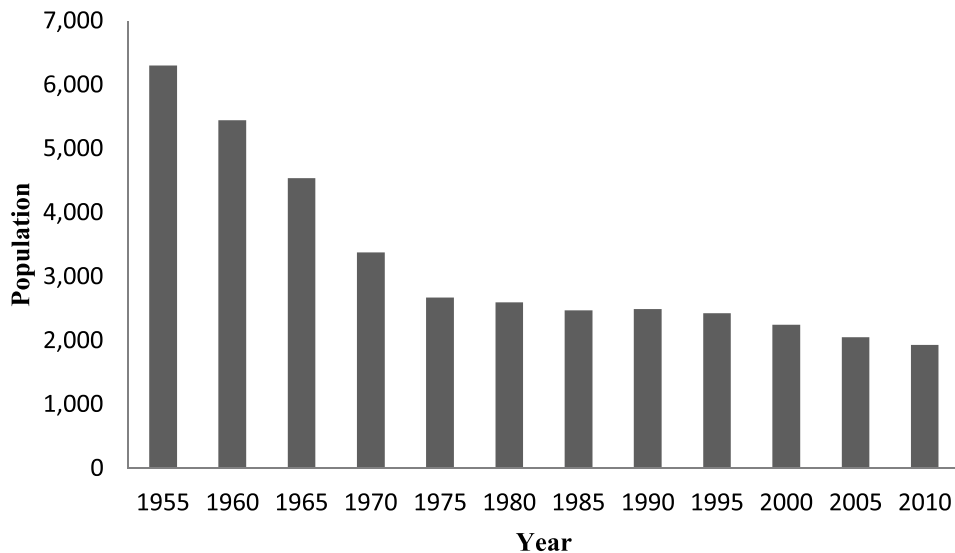


Fig.2. Changes in the population in Uken Village.

図2 宇検村の人口推移（総務省統計局のe-statに掲載されている1955（昭和30）年から2010（平成22）年までの国勢調査のデータを参照した）

8 2013（平成25）年8月末の役場調べによる。

どであった。しかし、「精霊殿」建設の直前には約6割を本来管理すべき人々が他出した墓が占め、多い人で4つ～5つの墓を管理している状況にあったという。昭和50年代半ばに他出先から戻り、こうした状況を目の当たりにしたある屋鈍集落の住民は、「もし他の人（筆者注記：他出者）が帰って来なければ、もう自分ひとりで何ヒキって見ないといけない。それを想像した時に、これはもう大きな問題になる」（60歳代・男性Aさん）と感じ、「精霊殿」建設に注力していったと語った。このように、屋鈍集落では墓管理の負担増加が建設へ向かわせる一つの動因となったのである。

他方、田検集落の場合は屋鈍ほど深刻な状況は聞かれないが、墓地の一部が荒れていたとされる（渡 1975：73）。また、集落を離れたシンセキに代わり、自主的に墓掃除や墓参を行っていたという話も聞かれる（80歳代・女性Bさん、80歳代・女性Cさん）。特に、当該地域には基本的に月2回（旧暦1日と15日）の墓参が規範として存在する⁹。そのため、頻繁に帰郷することが難しかった他出者にとって墓の管理は一つの懸念材料であり、これが「墓の共同化」の一因になったと考えられる。これについては章を改めて後述したい。

以上、本土復帰後に生じた産業の変化と人口動態を概観した。高度経済成長期以降に生じた大規模な向都離村は奄美だけに生じた問題ではない。昭和30年代以降になると、社会全体において過疎の問題が取り沙汰されるようになる。1970（昭和45）年に過疎法が制定されたことから、「墓の共同化」が案出された昭和40年代は全国的な問題として過疎が認識され、語られた時代の最中であったといえる。そうした中で、自らが墓管理に直接関わることのできない他出者とその墓を彼らに代わって管理する集落民を生んだという意味において、人口の急減が与えた影響は大きかったと考えられる。

社会関係の変化と新しい行事の創出

昭和30年代に田検集落で調査をした九学会連合の報告書からは、集落内の社会関係に変化の兆しを見て取れる。たとえば、当時の状況について以下のように記述されている。「村会議員その他についても戦後においては、部落決定の候補者以外に立候補者がでるといった事態もおこり、現金収入の額、出稼ぎ者よりの送金、農業経営の優劣、個人的資質などが前面にでてくる傾向がつよまっている。現在の段階では<ヒキ>の点で有力な家と経済力がおおむね一致し、官公庁関係にポストをもっているのが、急激な変化や動揺があるわけではないが、すでに今後におこる事態の萌芽は存在している」（関ほか 1959：333-334）。これが昭和50年代に行われた第2回調査の報告になると、農業に関わる共同作業や、道普請などこれまで生活を支えてきたいくつかの共同作業が行われなくなっていることがわかる。さらには「過疎化の進む中で、一方では地域組織を維持してゆくことに危機意識を感じ、特

9 現状として田検では月2回の墓参は個人の判断に任せられ、強制力を伴うものではない。

定の血縁的なつながりよりも、ムラぐるみの活動で結合を再確認しようとする方向を強く意識しながらも、年齢構成その他に規定されて、活発な活動を行えないという事態にある」(松原ほか 1982: 439)と述べられている。これらの報告からは、人々の言動を規定してきた社会規範に揺らぎが見られ、しだいに集落内の「共同性」が低下する状況にあったことがうかがえる。そして、人口流出に伴う過疎化といった事態がそれに追い打ちをかけていたといえる。

他方で、こうした状況を改善させるような動きも見られる。たとえば、^{たんこ}端午^こ一心会^{いっしんかい}という他集落にはない独自の集落行事の創出である。これは男女の節句を集落合同で祝い、賞状(「慶びのことば」と5月5日に因んだ550円を初節句の子どもたちに贈り、あわせて運動会などレクリエーションを行うものである。対象となるのは集落在住の誕生児に留まらず、集落外に暮らす関係者の子どもまでを含む。すでにこの会を始めた方は故人となったが、後述するように彼は「精霊殿」建設の陣頭指揮にあたった人物でもある(Dさん・故人)。活動は現在まで続いており、区長や青壮年団の運営のもと集落行事として定着している。会のきっかけはDさんが1964(昭和39)年に端午一心会を作り、次第に少なくなってきた集落の子どもたちを大事にしようとしたものだといわれる。「次第に子供の数が減り始め、人と人のつながりも希薄になりはじめていたため、集落の人々は喜んでこのころみを受け入れた」(北林 2000: 152-153)という。また、ある集落民は、この人物が「五月の節句にも、こいのぼりを立てられる家とそうでない家がある。せめて子どもたちにはそういう思いをさせないように、集落みんなで子どもの節句を祝うようにしたい」という思いを抱き行事を始めたと言った(40歳代・男性Eさん)。その他、集落内に生じていた不調和¹⁰を緩和させたいという思いから、皆が遊ぶ場を設けなかったのだろうと語る集落民もいた。このように、さまざまな思いがうかがえる端午一心会であるが、複数の場面において集落内の「共同性」が失われ、集落民が「ムラぐるみ」でそれに対処しなければならないと感じていた時代に、家庭ごとの行事を「共同化」して、集落が主体となって祝う端午一心会という行事が創出された。つまり、新しい行事の創出を通して集落の中に「ともに祝う」という雰囲気醸成されていく一つの機会となったのではないだろうか¹¹。それは個人の思いに端を発してはいるが、人口流出を一つの契機として行事を「共同化」という手段が想起されたわけである。そして、この行事の創出から約8年後に田検集落では「墓の共同化」が案出され、受容、実行されたという点を確認しておきたい。

10 こうした「共同性」が低下する状況に際し、雰囲気を緩和させるような動きとして端午一心会を捉えることも可能ではないだろうか。

「精霊殿」創出の過程

「墓の共同化」計画が案出された背景

奄美群島内の地域情報を伝える地元紙『南海日日新聞』に、「その名も“精霊殿”宇検村田検村の納骨堂が完成」の見出しで1972（昭和47）年8月25日に記事が掲載されていた。一部抜粋したものを紹介したい¹²。

「宇検村田検（〇〇区長、戸数八十八戸、人口二百八十四人）に珍しい“部落納骨堂”が完成、二十四日午後一時半から落成祝賀会が行われた。本土やよその土地に移住した人たちが、いちばん心配するのは、部落に残してきた先祖の墓が荒れていないかどうかということ。心にはかけながら、なかなか墓参に帰れない悩みをきいて部落有志が部落ぐるみの納骨堂建設を思いついた。同建設委員会（〇〇委員長）が発足、本土各地の部落出身者に呼びかけたところ浄財四百万円が集まった。昨年九月、墓地のある田検中学校裏山の通称赤崎の一角を地ならし、ことし一月から建設をはじめた。納骨堂は八角形のコンクリート造り、十八平方メートル、一段下に同じ規模の拝殿をこしらえ、この六月完成した。地ならしから建築工事一切はすべて部落民の労力提供（原文ママ）」

1972（昭和47）年、宇検村田検集落において「精霊殿」という名をもつ、集落が所有し管理の主体となる共同納骨堂が創設された。その背景には、記事に見られるような満足な墓参が出来ないと感じる他出者の存在や、ノウコツドウと呼ばれるカロートを備えた墓¹³の造立といった事情がある。本稿では、遺骨を納めるカロートを備えた墓をノウコツドウと呼称するが、これはヒキを単位として遺骨を納める形態をとる。以下では、これまでの聞き取り調査と資料に基づいて、「墓の共同化」を発案し創設に至った経緯について述べたい。

「精霊殿」が創られる以前は、現在施設が建っている赤崎の山の上に共同墓地が

-
- 11 生活改善運動の影響は否定できないが、人々が一堂に会してともに何かをする機会を設けたことは、人々を集合化させる機会や手段になったともいえる。田検集落では、家族がお祝いの場を設け、集落民が個別に各家庭を訪問する形をとっていた小学校入学のお祝いを、1977（昭和52）年から常会での決定を経て集落全体で行う合同の入学祝いへと改めた。新入生の父兄の発案により始まった行事だが、発案者たちはこれを生活改善運動の流れに位置づけて捉えている。その他、結婚式や葬式などについても生活改善運動の影響が見られる。たとえば、宇検村では1971（昭和46）年に中央公民館ができて以降、公民館で結婚式が行われるようになった（宮城 2000：124-125）。また、葬儀に関して田検集落の場合からいえば、1970年代後半から用いられる飲食物の簡素化や手伝い人員の削減等が試みられている。端午一心会のように集落主体で行われるようになった行事もあるが、結婚や葬儀といった側面から見ると、むしろ人生儀礼や社会慣行における集落による関与の度合いはしだいに薄らいでいったとみることができる。
- 12 資料中の人名は仮名に改めた。
- 13 大島本島における火葬以前の共同墓としては板石墓や積石墓がある。名瀬市の東海岸と宇検村一帯で集中的に見られる積石墓は「サンゴ石灰岩の石塊を積み上げて箱状、または半球状に作った墓」（小野 1989：137）であり、個人の墓、同族の墓、無縁者の墓などと伝承されている（小野 1989：162）。宇検村内でもモーヤと呼称されるこれらの積石墓が現存、あるいは報告されており、血縁に基づかない範囲で墓を共同する下地があったとも見られる。ただし、田検集落の場合はすでにモーヤの情報も定かではない。創設に際してかつての共同墓との連続性がないとはいえないが、あまり意識されていなかったのではないかと考えられる。

あり、ノウコツドウが4～5基ほど造られていたが、まだ数は少なかった¹⁴。しかし、そろそろ個別にノウコツドウを新設するという話が複数の家庭から出始めてもいた。創設の過程をまとめた小冊子『精霊殿の誕生と歩み』¹⁵には、「墓の共同化」がどのようにして話題に上ったか、当時の一場面が描かれている。

「昭和45年（1970年）の晩秋のある満月の夜に、〇〇さんと〇〇さん二人が月見をしながら一杯、晩酌をしつつ、いつもの世間話をして花を咲かせていた時、突然お墓の話しがどちらからともなく出ました。田検には個人で納骨堂¹⁶を作っている人が少ないが、共同納骨堂を作ったらどうだろうか、とのことでした」（米田 2005：1）¹⁷

当時の宇検村には、火葬した遺骨を納めるための共同納骨堂を集落で所有しているところはなく、身近にそういった存在もなかった。まさに住民たちの思い付きに端を発した「共同化」案であったといえる¹⁸。では、何故このような「共同化」を思い至ったのか。創設の際に区長を務め中心的な働きをしたHさんは、その背景にノウコツドウの造立に要する費用の軽減と「無縁仏」の存在があるとして、次のように語ってくれた。

80歳代・男性（Hさん）

「ある集落を見た時にですね、そこに最近流行の個人のノウコツドウがありますよね、コンクリで。あれがそうとう（筆者注記：費用が）かかるんですけどね。それをね、田検はそれまではあまりなかったんですけどね、こういう時代だからノウコツドウを作らないといけないということで話が出ていたんですよ。3軒か4軒かあったんですよ。僕はその当時、ある集落に行った時に、最近できたノウコツドウがね、当時はもう引きあげて、家族がみんな引き上げてあって無縁仏みたいな格好になっていたんですよ。これはせっかくの先祖が無縁仏とはもったいないなあと、それにその経費をかけるとはもったいないなあとって」

ここでHさんが言う「無縁仏みたいな格好」とは、新しく造られたノウコツドウ

14 ある集落民（80歳代・女性Fさん）の場合は、昭和30年代にセメント造りの基台をもつノウコツドウを造立したという。

15 集落民（70歳代・男性Gさん）が当時の中心人物へのインタビューに基づいて「精霊殿」の創設と33年後に行われた改修工事の経緯と様子について書きとめた小冊子である。なお、資料中の人名は仮名に改めている。

16 本稿でいうところのノウコツドウを指す。

17 創設の最初期に携わった人物や活動の時期については諸説あるが、複数の男性集落民が中心となってともに話し合いを進めていったという点は確かである。

18 他地域の事例を参考にしたのかどうかは、創設の中心人物たちの多くが故人であり定かでない。また、近隣集落では、兄弟や一族で費用を出し合い、ノウコツドウを造立する例も見受けられる。田検集落の場合も、集落の共同納骨堂を実現できない場合には、こうした形態で個別にノウコツドウを造立する話も出ていた。

を管理するはずの人々が不在であり、定期的な管理がされていない状態を指している。彼が語るように、ノウコツドウの造立には「そうとうかかる」という認識は広く共有されている。多くの集落民が経済的な負担とその軽減を「墓の共同化」の理由として挙げており、人々に新しい墓の造立を考えさせる大きな要因であったようだ。あるいは、立派な墓を造る一種の競合状態が生じるのではないかという懸念も見受けられる。もし個別にノウコツドウを造立した場合はどうなるのか。以下は、ある集落民が予想される事態を語ってくれたものである。

70歳代・男性（Iさん）

「問題はやっぱり、田舎はね、競争意識があるでしょ。そして、内地から来た人たちがノウコツドウ造ろう、ちしてるわけですよ。だから、そういうものをいったん作ったら、共同でできないから。いやあ、その、次々、競争みたいにしてできるから」

上記のような「競争」といった語りの他に、墓石の大きさが経済力を表す指標になっているというような話も村内では聞かれる。つまり、上述した端午一心会にも共通するが、墓石を通した経済的な格差が顕在化することをあらかじめ回避するような動きとして捉えることもできるのではないか。また、話が出た1970（昭和45）年当時、ノウコツドウを造立している家庭は少なかった。多額の費用を投じたノウコツドウの造立が相次ぐ前に「共同化」を決断できたことは、その分だけ各自のノウコツドウを無駄にしないで済んだと考えられる。また、個別にノウコツドウを造立するよりも安価で持続性の高い管理が期待できる「精霊殿」は、経済的な合理性にかなう方法として新しい「墓」を求める人々からの同意がより得やすかったといえる。

そして、「墓の共同化」を選んだもう一つの理由が、いずれ「無縁」になるかもしれない将来への不安である。上述のHさんにも見られたが、「無縁」あるいは「無縁仏」という言葉は創設の理由が語られる際によく登場し、人々を創設に向かわせる大きな動因であったと考えられる。当時の旧墓地の様子だが、「現在のような先代の墓の在り場所さえ判然せない茫々の草むらを、あちらこちらと尋ね廻る煩いもなく」（渡 1975：73）というように、墓地の一部が荒廃していたことを示す記述が残っている。旧墓地にはノウコツドウ以外に、埋葬地の上に石塔やツカを立てたものや石をのせたもの、あるいは洗骨の済んだ遺骨をまとめて骨壺に入れ土中に納めた墓があった。その中には誰も参る人のない墓もあったと聞く。しかし、Hさんや以下で紹介する集落民が示唆する「無縁」とは、将来的な可能性を含むものだと考えられる。次に示すのは、当時のある他出者からの意見を代弁した集落民の語りである。

80歳代・女性（Bさん）

「〇〇さんと〇〇さんが晩酌しながら、田検の集落は一人一人ノウコツ

ドウ作ってるけど、集落みんなでした方がいいんじゃないかなって、そう話が出た。それを、〇〇さんと相談した。そこでも、大阪とかに出た方が田舎に帰って『精霊殿を造らんな、もうみんなが無縁仏になる』って話が出ていたから、これは一人一人百万あまりのお金使うより集落みんなでしようと相談したらしい」

かつての墓地の様子にふれた文章には「最近ヒキ、ビキで納骨堂が出来ているのもあり、又他にもこのような計画があるとのことも伺っているが、いづれにしても個々別々に造るとなれば経費もかさみ、其の他にも色々の事情が伴い、ゆくゆく墓参りするものさえなく、やがては無縁仏とならないとも限らない」（渡 1975：73-74）とも記されている。こうした認識からうかがえるのは、経費の問題と「やがては無縁仏とならないとも限らない」という将来像であろう。以上のように、「精霊殿」案出の経緯について伝わる話にはいくつかパターンがあるが、そこで共通して語られるのはすでに存在する「無縁仏」、あるいは「無縁仏」になる可能性¹⁹、そしてノウコツドウ造立に要する費用の軽減であり、加えて経済的格差の顕在化を望まない一部の集落民の意向が底流にあったと思われる。これらが集落民に「墓の共同化」を提案させた理由だったといえる。

合意形成と建設に向けた動き

ここでは小冊子『精霊殿の誕生と歩み』と、筆者の聞き取り調査から得られた資料に基づき、異なる立場にある人々がどのようにして「墓の共同化」に向けた合意を得ていくのか、その過程を描く。

集落内で「墓の共同化」が案出されたのは1970（昭和45）年の頃だったとされる。その後、集落の男性たちを中心として非公式にいく度かこの案について話し合いが繰り返され、次いで役員会で諮ることになった。そして、役員会で全員の賛同が得られたことから、建設や敷地、資金などある程度の見通しを立てた。その上で1971（昭和46）年3月に集落常会で趣旨説明を行い、満場一致で賛成を得た。目指したのは「無縁仏、草花の香、線香の香の途絶えない共同納骨堂」（米田2005：1）であった。同年4月には各ヒキの代表者による集会（出席者：男17名、女28名）がもたれ、建設委員会を立ち上げて建設することが決定された。

『田検精霊殿10周年記念誌』には、「何よりも皆様とともに誇りにもてますことは、この精霊殿が子孫一人ひとりが物心両面にわたってのことは申すまでもなく、それぞれの宗教、個人の観念を乗り越えて、「クァ」「マガ」の祖先崇拜の真心が結集して建立できたということでもあります」（田検精霊殿10周年記念式典実行委員会1982：2）という創設当時に区長を務めたHさんの言葉が記されている。福岡が指摘するように、多くの人々は「先祖を大切にすること」を重視している。ここでは墓を造り、不特定多数の集落民による定期的な墓参が行える状況を整えることが「祖

19 墓があっても定期的な墓参がなされないことは先祖を粗末にすることだと認識する傾向がある。ただ、現在の田検集落の場合、「無縁仏」そのものや「無縁仏」がもたらす崇りを恐れるような気風は薄いようである。

先崇拜」の表れとして捉えられている。

また、多様な信仰がある中で的一致という語りは当時の集落の宗教状況と関係している。昭和40年代の集落には、複数の信仰を持つ人々が存在した。仏教、天理教、イエス之御霊教会、そして創価学会である²⁰。たとえば、「精霊殿」創設の話が進む中で「宗教はどうするのか」という問題が出た。これに対しては「線香を立てるのもあれば寝かせるのもある、自由にしましょう」（70歳代・男性Jさん）とまとまるとされる。こうした意思の統一を助けた要因としては、集落民が墓の問題を「先祖」の問題として捉えており、個人の信仰と「ウヤフジ」と呼ばれる個人の先祖、あるいは集落を築き上げた先祖たちに対する思いとは矛盾するものではないと考える傾向にあることを挙げられる（福ヶ迫 2011：165）。そして、事業を推進する側も死後の個別の祀りにまでは立ち入らず、あくまで遺骨を収蔵するための施設と維持管理を共同するという、個人の信仰に配慮する姿勢を明確に打ち出し理解を求めたといえる²¹。

次に建設に向けた具体的な動きについて述べたい。当時、集落は財政に余裕がなかったため、集落有林の一部の立木売買契約を150万円で結び資金に充てた。しかし、合計で約370万円（本殿120万円、拝殿90万円、その他）（渡 1975：75-76）を要し、資金が不足していた。そこで、「大阪、東京、鹿児島の方々に一応話をし、了解を得て、いくばくかの援助を頂こうじゃないか」（80歳代・男性Hさん）ということで他出者に趣意書を発送した。これに際し、関東関西方面へ趣旨説明と寄付金調達のため、建設委員らが10日前後の出張を行っている。また、120坪ほどの敷地を確保するために候補地の地権者と交渉した。その結果、この計画に喜んで賛同した地権者から無償で土地提供があり、計画を後押しした²²。

関東、関西での趣旨説明に際して、当初は本当にこの計画を成し得るのかという疑問の声も一部にはあったようである。しかし、他出者から寄付を募る代わり労働は集落の皆で行うとして理解を求めた。たとえばHさんは、説明会を開いた際の他出者とのやり取りを次のように述懐している。

80歳代・男性（Hさん）

「精霊殿のね、建設する時、東京大阪の方に出ている連中に私は説明に行ったんですよ。皆、賛成してくれて。大阪東京の（筆者注記：田検）出身者の方々がはっきり言ってきてますからね。『労力はどうする』（筆者注記：という質問に対して）建設は地元の皆でやりますと、はっきり言ってる。『建設は結構なことだけど、後の管理はどうするんだ』と言う人がいた。だから私は『後の管理は集落全部でやる』ということをはっきり断言

20 仏教の場合は名瀬で行う告別式や火葬に際して僧侶が参与することはあるが、集落で行う納骨式や年忌などに際しては参与しないことも多い。

21 全過程を通して本計画に明確な反対があったわけではないが、常会とは別の機会を通して、それぞれが抱える疑問を一つずつ解決していく過程があったのではないと思われる。

22 「精霊殿」横にこの人物を称える顕彰碑が建てられている。施設名称については他出者も含めて広く募り、「精霊殿」という名が付けられた。

した。その通りやっていますよ」

ここでは、建設に要する労力はすべて集落民が負担し、その代わり寄付を求めたいということ、そして、建設後の施設管理は集落が担っていくという表明のもとで他出者からの合意を得ていく様子がうかがえる。最終的に人々はこの提案を受け入れ、関東からは一律2万円、関西からはそれぞれの状況に応じた額の寄付を得て、これが大きな財源となったわけである。

寄付と労力奉仕、そして技術者に支えられた手造りの墓

建設を物質的な側面から支えたのは集落出身者からの寄付金と土地の無償提供、そして集落在住者による労力奉仕であった。趣意説明を兼ねた寄付の呼びかけに同行したHさんは「建設費はね、皆さんの、それに応じた分相応のしていただければいいと。労働は集落の皆さんでやりますから」と労力を集落で確保する代わりに寄付への理解を求めている。

このHさんの言葉通り、建設はかつて鉄筋コンクリート建築の技術者として活躍したDさんに一任し、建設委員長である彼の指導の下でその他の集落民は労力奉仕で建設を担うことになった。1971（昭和46）年の9月に入ってから、役場から借りたブルドーザーを用いた本格的な整地作業が始まった²³。そして、1972（昭和47）年1月からは各戸から1名が参加し、13～14名ずつで構成された4班に分かれ、各班長のもとで作業が進められた。男性が出られない場合は女性も作業に参加し、水汲みや土運びなどに従事した²⁴。農作業をめぐる協働がほとんど見られなくなり、集落の共同作業も減りはしたが、集落民による労力奉仕を得て集落内の環境整備にあたることはこの時期においてもまだなされていたという²⁵。その点からいえば、後で触れるように現在の状況と比べて集落内で労力を確保することが容易だったもととれる²⁶。

建設完了後はクジ引きによる納骨場所の選定や、旧墓地で使用していた墓石を上段に並べる作業、植栽など環境整備が行われた。なお、赤崎の旧墓地には60基ほどの墓があり、在住者ならびに他出した親族によって遺骨や骨つぼが掘り起こされた。その後、その場で火葬し骨をまとめ、骨壺に納めたものが「精霊殿」に納められた²⁷。1972（昭和47）年8月24日には「精霊殿」前にて落成式を行い、その後は

23 整地に際して役場のブルドーザーを貸借しているが、田検では行政から公園整備費としての補助を受けていない。この事実は集落民が田検「精霊殿」を語る際の特徴の一つである。

24 建設作業は個人の状況をかながみながら、だいたい11日までで、それ以上出る場合は人夫としての賃金支給があったようである。各世帯からの参加が求められたため、世帯員の男性が出稼ぎなどの事情により参加できない場合には女性も作業に参加した。

25 たとえば、1961（昭和36）年には集落民の労力提供と一部篤志家の寄付により火の見番小屋を完成させている（渡 1975：107）。

26 当時は出稼ぎに出る者や出稼ぎに出たまま集落に戻らないケースもあったようだが、現在よりも集落の戸数・人口は多かったという。参考までに1970（昭和45）年の集落の戸数を挙げると、95戸、304人であった（若林 1981：315）。

27 田検集落においては昭和40年代半ばにもっとも早く火葬がなされたようである。「精霊殿」創設以降に土葬したという話は聞かれない。

場所を中学校体育館に移して祝賀会が執り行われている。

完成した施設は約400m²の敷地内に建つ八角形の本殿（16m²）と、参拝スペースである拝殿（20m²）の2つからなる。拝殿から向かって正面奥の階段を上った先に本殿があり、これが納骨堂になっている。内部には壁面に沿って木製の棚が据えられており、納骨スペースが70か所ある²⁸。納骨スペース一つ分が一つのヒキに対応しているという。普段、扉は施錠され中を見られないが、お盆の時や必要に応じて鍵を開けてもらうことができる。ただ、普段の墓参に際しては拝殿にて参拝する人が多い。

さて、建設完了後の施設の維持管理だが、創設当初から現在まで管理組合は存在せず、管理責任者は鍵を預かる区長となっている。1990年代末までは老人会が定期的な清掃作業を担ってきた。しかし、「仕事を持つ60歳代前半の会員の不参加率の高さ、また老人クラブ全体の高齢化などの理由」（野口 2000：58-59）により集落全体で取り組むようになった。2005（平成17）年の改修工事後は、毎月の第3日曜日の朝7時から集落を2つに分けて交互に清掃作業にあっている。任意の作業であるが、あえて作業を設定することで墓参の機会を設けている²⁹。

このように、集落民は田検「精霊殿」の創設から現在に至るまでの維持管理にあたって「労力でお金を積んできた」のである。また、利用者の規定等、これまでに明文化された利用規則は存在していない。他出者が帰省する際に寄付を行うことはあるが、維持費や納骨スペースの確保に要する価格は設定されていない。これは近年、宇検村内で建設された他集落の「精霊殿」との相違点でもある。たとえば、田検「精霊殿」に納骨スペースを確保するためにはどのような条件が必要になるかとの問いかけに対して、創設の中心となって働いたHさんは次のように述べた。

80歳代・男性（Hさん）

「いやいや、自由よ。金いくら払って入殿（筆者注記：納骨スペースの確保および納骨）じゃないですよ。ただしそれは縁故のある人って。建設当時はある程度、それはまあ、労力奉仕も集落の皆でやったんです。経費はかかってますよ。でも、入る人から貰えなんて、そんなこと絶対いけない」

Hさんは集落民自らが労力奉仕をし、先祖が育てた集落有林の売却資金と他出者からの寄付をもとに造り上げた創設過程を引き合いに出しながら、お金を必要としない理由を語ってくれた。Hさんの語りにおいては、皆で造り上げたというその事

28 棚には〇〇家と記されたプレートが貼付されている。たとえば、骨壺が増えて納骨スペースが狭くなったという理由で新たにスペースを確保することもできる。また、集落は被納骨者を完全に把握している訳ではない。なお、創設から40年以上を経た現在、当初設けた納骨スペース（70か所）の空きがなくなり、新しく本殿内部中央に棚を設けた（20か所）。

29 田検「精霊殿」の創設に際し中心となって発案、議論し、建設作業に従事したのは男性たちであった。ふだんの墓参に際しては実質的に女性高齢者の参加が多く聞かれたが、特に性分業が強く志向されているようには感じられない。ただ、現在の月1回行われる交代制の清掃作業には各世帯から任意の参加者が集うため男女ともに参加があり、墓掃除の際に墓参する男性の姿も定期的に見られるようになった。

実が重視されているといえる。田検「精霊殿」の拝殿上部には、個人がその創設にどのように関与したのかという協働の記録が今も残る。それは、「労力奉仕日数」と「寄付金額」という形であり、労働日数が寄付金額と並んでいる。いうなれば、「お金を出したこと」と「手を出したこと」が等価として表象されているといえよう。

そしてまた、業者を依頼することなく集落民自身によって建設が可能になったのには、集落在住のDさんという技術者の存在が非常に大きい。Dさんは前述した端午一心会の創設者でもあるが、1900（明治33）年に田検で生まれた。1919（大正8）年に本土に渡り、シマに戻ることを考え、奄美で役立つ技術を求めて夜間学校に通いながら建築技師になった人物である。帰郷後、彼は1930（昭和5）年に大島支庁の建築技師となり、戦後は自ら建設会社を興して、村内においても学校を初めとする多くの建築物を手掛けた。Dさんは1966（昭和41）年に建設業を閉じて、その後は田検に暮らしていた（先田 1993：69-82）。そして、引退後に、彼がかつて身に着けた技術をいかして取り組んだのが「精霊殿」の建設指導であった。Dさん自身は仮枠大工と呼ばれる鉄筋建築物を専門とする技術者であり、コンクリート造りの共同納骨堂建設を指導する人物としては適任だったと考えられる。建設に際してはDさんが模型を作り、建設委員長として集落民を指導したといわれる。このように、当時の田検集落には技術指導の面で恵まれた人材がいたことも創設を可能にした大きな要因であるといえる。

なぜ田検集落はいちはやく「墓の共同化」を成し得たのか

本稿では、鹿児島県本土における納骨堂の増加時期と時を同じくして、昭和40年代半ばに「墓の共同化」に取り組んだ宇検村田検集落の「精霊殿」創設の事例を取り上げた。そして、創設の過程を再構成し、早期に実現しえた要因を複数の側面から明らかにした。

大浦町の事例のように、県本土においても産業化による人口流出を背景として共同納骨堂を建設した地域が見られた。昭和40年代～昭和50年代は人口流出期であると同時に、次第に生活が安定へ向かう時期であったとも捉えられる。墓の造立や墓地の整備には多額の資金を要するため、収入の安定、生活環境の向上は一つの条件であるだろう。しかし、戦後の行政分離により復興が遅れた奄美大島、そして大島本島の中でも交通の不便な宇検村にあっては、高度経済成長期の豊かさを同時代的に享受できていたとは考えにくい。本土復帰後、1954（昭和29）年に制定された奄美群島復興特別措置法では、生活水準を戦前の本土並みに引き上げることが目指された。その後、急速に進んだ生活環境の改善を考慮するとしても、1972（昭和47）年の創設は鹿児島県内各地における「共同納骨堂」建設ブームに照らして見ても早期の取り組みであった。

特に、墓制の面から人口流出との関係を見れば、村内では墓管理の代行や新しく造立した墓の放棄といった状況がうかがえた。ただ、多数生じている墓の管理代行とその負担増といった喫緊の問題に対処したいという姿勢が強かうかがえた屋鈍集

落の事例に比べると、田検集落の場合は将来的な可能性に対する、いくぶん先を見据えた活動であったように見受けられる。それは、持続的な墓管理に対する不安の声はあったものの、周辺集落に比べると人口減少率が低く、墓管理の代行や継承困難が危機的状況とまでは認識されていなかったという事由による。むしろ、火葬が始まり、経費をかけて新しくノウコツドウを造ることをきっかけとして、先の見えないこれからの社会、あるいは家族、親族といった存在や関係性を見据えた時に、そうした可能性を事前に回避する形で「墓の共同化」が案出されたと考えられる。

創設を支えた理念的側面だが、たとえば、芦検集落を調査した福岡は、集落民が備える先祖を敬い大切にするという精神的な共通基盤と、郷友会の理解と協力、景観に宗教色を持たせなかったこと、そして平等な社会的関係によって結ばれ、進取の気性に富む集落の情緒的な面での個性を一因として挙げている（福岡 2000：55-56）。これらは田検においても同じく「墓の共同化」実現を支えた理念の一つだといえる。『精霊殿の誕生とあゆみ』には、「精霊殿」を計画するにあたり、「ご先祖様（ウヤフジー）には、宗教はいろいろあるが、どんな宗教であろうとも田検（シマ）のご先祖様（ウヤフジー）に変わりはない」（米田 2005：1）という意味のもとシマぐるみで取り組んだと記されている。たとえ信仰が異なっても「墓のことであれば反対はない」（80歳代・女性Kさん）というように、集落民は墓を「先祖」にまつわる問題として認識し、個人の信仰とは矛盾しないと考える傾向にある。そして、集落民が「先祖はもとをただしていけば一緒」（70歳代・男性Iさん）と語るように、比較的に入込者が少なく集落内での婚姻が多いため、何かしら「ひっぱりがある」（つながりがある）という感覚を持ちえたこともこれを支えたと考えられる。また、幾人かの集落民は田検集落を「物事にこだわらない」「いい加減ではあるが、あるがままに受け入れる」と評する。この姿勢もまた反対なく計画を進めることができた一因であり、その柔軟性がプラスに働いた出来事だったといえよう。この集落の個性という点も芦検の事例と共通するものであろう。

では、田検集落に特徴的な要因としては何を挙げることができるのか。本稿では端午一心会という過疎化に対する具体的手立てとして創出された集落合同の行事を「共同化」の先例と位置付け、田検集落に特徴的な要因として考察した。活動が始まった当初、村内の他集落にこの行事はなく、田検集落民が当時の集落状況をかながみて独自に創り出した集落在住者や関係者の憩いの場であり、子どもの誕生を祝う場であった。端午一心会と「精霊殿」の創設を直接の因果関係でもって語ることは難しいが、この行事の生みの親である人物（Dさん）が「精霊殿」の創設に際しても中心的な働きをしたことを考えると、わずかながらでもその機運を読み取ることができるのではないだろうか。集落内の「共同性」が低下する状況にあって、集落が主体となって「ともに祝う」という姿勢や試みが「墓の共同化」がなされる前にすでに田検集落の一部にはあり、そうした雰囲気が醸成されていたことは注目に値する。

また、子どもの日に誕生児へ授与される「慶びのことば」には、発案者のDさんが残した「すくすくと育て 玉こがね 成長し（ふでて）ためになれ 島のたか

ら」ということばが記されている。この活動からは、将来を担う子どもたち世代を「島のたから」として集落全体で育ていこうとする現行世代からの共同的な養育のまなざしを読み取ることができるだろう。他方で田検「精霊殿」の創設からは、これまで集落を支えてきた先輩たちである先行世代に向けた共同的な「孝行」のまなざしを見出すことも可能だろう。そしていずれの取り組みにも共通するのは、集落の中心となる現行世代自身が抱えていた無縁化への懸念や経済的な問題、あるいは集落人口の減少等といった日常生活で直面している諸問題がその活動の根幹にある点だと考えられる。つまり、ここに見られるのは今を生きる集落民が抱える問題を、次世代や前世代への働きかけを通して改善していくという集落運営の構造であり、2つの活動はこれがうまく機能した例だと考えられる。だからこそ、集落民の熱心な取り組みが見られたといえよう。

そして、行政的な指導や身近な先例がない中で住民たちの「ひらめき」が具体的な形になりえたのは、発案の面でも建設の面でも先頭に立ち人々をまとめきれぬ人物が集落内に複数存在し、彼らの連携が「ひらめき」を「計画」にまで進めることが出来たからである。また、創設を支えた要因を物質的な側面から見れば、「先祖」が守ってくれた山の資源や他出者からの寄付、土地の無償提供、在住者の労力奉仕、そしてコンクリート建築の技術者という要素が加わることで「精霊殿」という形あるものに成し得た。特に技術者の存在は事業推進の大きな力である。それは、集落民に自分たちだけで一から鉄筋コンクリート造りの建造物を生み出す自信を与え、田検「精霊殿」のいち早い創設を支えた特徴的な要因だといえる。

以上のことに加え、本土復帰後に生じた人口流出は在住者と他出者の双方に「無縁」の可能性を想起させるものであり、これが「共同化」を意識する契機となった。特に、帰省の機会を通じて「いずれ無縁にならないとも限らない」という思いが集合的な問題意識として共有されていったと考えられる。また、火葬の開始時期とも合致することから、ノウコツドウの造立を視野に入れた動きがありながらもその数が少なく、造立に要する費用の軽減が望まれていたこともその実現を助けたといえる。社会の変化が激しく先の見えない状況にあって集落に墓管理の共同性を求め、集落もまた施設建設と管理を共同化するという方法でそれに応えたのが田検「精霊殿」の創設だったと考えられる。

結 論

孝本貢は、新潟県糸魚川における百霊廟の造立という「墓の共同化」に対して、「この百霊廟の事例は、村落共同体が無縁化に対処し、その祭祀を共同体として引き受ける力を持っていたことを顕わしている」（孝本 2001：81）と指摘した。宗教的な背景や遺骨と合葬に対する観念、創設年代等は異なるが、田検「精霊殿」にもまたこの指摘は有効であろう。それは「無縁仏」に対処するため、管理の補助として集落が選り取られ、集落もまたそれに応えた事例だといえるからだ。そして、何よ

り後に続く「精霊殿」の先駆けとなり、雛形になったことを考えるとまさに先見の明であったといえる。

最後に今後の課題について触れておきたい。創設からすでに40年以上が経過した田検「精霊殿」は周期的な記念式典を行い、施設の老朽化についても「適材適所」「臨機応変」に対応し、2005（平成17）年には創設当初と同じく集落民の労力奉仕によって無事改修工事を終えた。しかし、近年では明確な指針や見通しを持たずに対応する現状に対して、不安を抱いている様子も一部にはうかがえる。複数の人々がともに創りだしたモノがどのように管理され、時間の経過とともにどのような変化を迎えるのか。他に先駆けて創設された田検「精霊殿」なればこそ、他に先駆けて対応が求められていく問題であるともいえよう。今後も引き続き「墓の共同化」の動向に注目していきたい。

引用文献

- 井上治代 2001. 産業化による人口移動と墓祭祀の変容－鹿児島県大浦町調査より－. 宗教と社会, 7: 47-70.
- 井上治代 2003. 墓と家族の変容. 287頁, 岩波書店, 東京.
- 上野和男 1980. ハラとハロジ. 「講座日本の民俗2」(最上孝敬編), 139-156, 有精堂出版, 東京.
- 小野重朗 1989. 奄美大島の板石墓・積石墓. 「シンポジウム南島の墓－沖縄の葬制・墓制」(沖縄県地域史協議会編), 137-170, 沖縄出版, 沖縄.
- 加藤正春 2001. 奄美・沖縄における火葬の導入と普及過程. 生活文化研究所年報, 14: 87-124.
- 北林かや 2000. 出産と養育. 「奄美・宇検村田検の生活誌」(国際基督教大学人類学研究室編), 141-154, 国際基督教大学人類学研究室, 東京.
- 孝本 貢 1992. 共同納骨碑の造立と先祖祭祀－新潟県糸魚川市押上「百霊廟」の事例－. 国立歴史民俗博物館研究報告, 41: 151-174.
- 孝本 貢 2001. 現代日本における先祖祭祀. 269頁, 御茶の水書房, 東京.
- 先田光演 1993. 心から島と子供を愛した建築技師 渡武彦. 「郷土の先人に学ぶ4」(郷土の先人に学ぶ刊行委員会編), 69-82, 郷土の先人に学ぶ刊行委員会, 鹿児島.
- 関 敬吾・北川隆吉・松原治郎 1959. 第三部 奄美大島における地域社会の構造 奄美大島宇検村田検部落 組織と社会構造 I 宇検村田検. 「奄美－自然と文化－」(九学会連合奄美大島共同調査委員会編), 327-340, 日本学術振興会, 東京.
- 津波高志 2009. 奄美における葬送儀礼の外部化－大和村津名久の事例を中心に－. 人間科学, 23: 3-34.
- 野口洋輔 2000. 社会集団の実情とその変遷. 「奄美・宇検村田検の生活誌」(国際

- 基督教大学人類学研究室編), 56-67, 国際基督教大学人類学研究室, 東京.
- 福岡直子 2000. 奄美大島<芦検>の新しい共同墓地-建設に至る経過と墓制の変化-. 民俗文化研究, 1:37-75.
- 福ヶ追加那 2011. 集落共同納骨堂の創設-奄美大島宇検村の事例から-. 「クロスボーダーの地域学」(竹内勝徳・藤内哲也・西村 明編), 159-177, 南方新社, 鹿児島.
- 松原治郎・戸谷 修・蓮見音彦・鶴飼照喜 1982. 第3篇 奄美社会の変動 第1章 地域社会と経済 第1節 奄美農村の構造と変動. 「奄美-自然・文化・社会-」(九学会連合奄美調査委員会編), 423-452, 弘文堂, 東京.
- 宮城あかね 2000. 年中行事と人生儀礼の食文化. 「奄美・宇検村田検の生活誌」(国際基督教大学人類学研究室編), 113-140, 国際基督教大学人類学研究室, 東京.
- 若林敬子 1981. 奄美大島南部過疎地域の解体過程-宇検村田検-. 「第八章 奄美農村の構造と変動」(松原治郎・戸谷修・蓮見音彦編), 269-340, 御茶の水書房, 東京.
- 渡 武彦 1975. 親がなしぬしま. 248頁, (私家版).

参考資料

- 田検精霊殿10周年記念式典実行委員会 1982. 田検精霊殿10周年記念誌. 29頁, (非売品).
- 南海日日新聞社 1972. その名も“精霊殿”宇検村田検 村の納骨堂が完成, 8月25日朝刊.
- 米田保吉 2005. 精霊殿の誕生と歩み. 6頁, (非売品).

参考ウェブサイト

- 総務省統計局e-statの国勢調査のページ
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/eStatTopPortal.do> (2013年9月30日閲覧)